

第20回記念 日本認知症グループホーム全国大会 研修報告

「おまかせください！認知症グループホームに！！」

～地域包括システムで求められる認知症グループホームの役割～

日時：平成30年9月7日（金）、8日（土）

会場：栃木県総合文化センター

主催：公益社団法人 日本認知症グループホーム協会

1. 基調講演 厚生労働省老健局長 大島 一博 氏

テーマ「介護をめぐる課題と展望」

《西暦2000年の介護保険導入》

〈当時の大目標〉

- ・介護サービスの市場を作る。
- ・介護を社会化する。

介護保険制度・・・制度創設以来、16年経過し、65歳以上被保険者数が1.6倍に増加するなかで、サービス利用者数は3.5倍に増加。高齢者の介護に無くてはならないものとして定着・発展している。

〈当時の中目標・小目標〉

- ・社会的入院の解消
- ・医療と福祉の連携
- ・認知症支援サービス
- ・サービスと保険料の均衡
- ・フォーマルケアとインフォーマルケアの組み合わせ



○人材面・財政面で、介護制度の持続可能性の不安をなくす。

○認知症になっても大丈夫な社会にする。

今後、人口減少が進み、高齢者への介護の担い手が減少しつつある中、平均寿命の伸びもあり「人生100年時代」となっている。

今後～◇少子化の克服～待機児童対策、働き方改革、子育て費用の軽減など

◇人生100年時代～生涯現役、健康寿命、リカレント教育など

→ 全世代型社会保障へ

◇給付と負担のバランス～世代別バランス、世代内バランス

今後、2040年頃までには65歳以上の人口が増加していく。少子化の克服に向け、子育て費用の負担や妊娠や子育てに関する不安や孤立感への支援も必要となってくる。又、介護の担い手を確保する為、年収の安定や高齢者・外国人等の就労拡大やIT、AI、センサー等の活用による生産性向上。介護業界のイメージ改善（年収・長時間労働の是正）を行っていくことが必要。

2. 教育講演 香川大学医学部 精神神経医学講座 教授 中村 祐 氏

テーマ「グループホームで見られるBPSDとその対応」

認知症の大部分を占めるアルツハイマー型認知症においては、様々な症状が見られ、記憶障害・見当識障害・失認・失語・実行機能障害は中核症状と言われ、認知症の病態に直結した症状です。

- ・BPSD・・・中核症状以外の心理と行動面での症状。

「興奮」「攻撃性」のみを示す言葉ではなく、多岐にわたることが多く、出現には個人差がある。

- ・BPSDの出現・・・個人差があり、環境やもとの性格傾向など様々な要因が大きく寄与している。

BPSDを理解する上では、それらの情報や現在利用者が置かれている環境・状況をしっかり把握することが重要であり、原因の根幹である中核症状の理解が必要。

たとえば、「仕舞い忘れ」と「物盗られ妄想」の違い。

仕舞い忘れ・・・責任の所在が誰であるかであり、他人や自分が日ごろ疑っている人にあると考えた場合、「物取られ申そう妄想」の形をとることになる。

したがって、「物盗られ妄想」へは、一義的に抗精神薬を用いることは良くないと考えられ、適切な対応や適切な抗認知症薬の使用が、まずとるべき対応である。

3. 分科会

今回、事例報告やポスターセッションによる報告が107事業所からありました。

その中で・・・

① 暴力行為≠自己防衛行為

暴力行為のある方が入居する。内容→徘徊し転倒し病院へ救急搬送。その先で、他患者への暴力行為、柱の陰に隠れる等の行動障害あり、主治医より「リスパダールの増量。又は、環境を変えるか」の選択肢。

- ・スタッフの気持ち→ネガティブになる。
- ・家族の気持ち→「それ以外の選択肢がないのか」、「ホームへ入居して危害を与えないか」

その中、ホーム入居となる。

《活動の成果と評価》

現病歴や内服の特性を知ること、「暴力行為」は糖尿病Ⅱ型の血糖値不安定から来るものと仮説を立てることができ。そのことから、興奮や警戒心が起こりやすく、暴力行為・自己防衛行為となる事が考えられる。ご家族にも、行動障害となる理由を糖尿病から仮説をたて、血糖値のコントロールが必要であることを説明し、職員、家族の不安と負担を緩和することができた。また、地区のゴルフ仲間の協力で、グランドゴルフや愛犬の散歩を運動に取り入れることでホームでの生活が安心して送れるようになった。

《考察》

「暴力行為」という言葉は支援者に先入観を与えやすい。暴力行為というのは自分の身を守る為の「自己防衛行為」ではないかと考えるようになり、行動障害には必ず意味があると学ぶことができた。そして、家族と地区の仲間といった住み慣れた場所・関わり慣れたとの協力で笑顔のある暮らしを地域の方、職員共同で入居者の暮らしを支援することができた。

② 入居者の情報交換ツールの発見 ～人生の先輩！生き様を教えてください～

電子カルテが導入され、法人9事業所で情報が共有され情報管理には効果的だが、手書きと異なり、必要最低限の情報入力となっていた。また、家族より口頭での入居者の生活を伝達されても内容が分かりにくいとの指摘もあり、家族間との「交換ノート」と位置づけ、入居者との会話や様子を記入する『自分史ノート』を作成し、職員間では利用者それぞれを理解し、家族は施設での様子を窺い知れる情報交換ツールとなった。

- ・目的～カルテ電子化により、利用者情報が希薄となったことを補うことを含め、情報共有ツールを作成する。
- ・方法～個人ごとの部屋にノートを設置し、職員及び家族・面会者が閲覧し、記入する。

《結果》

- ・毎日行くと・・・行事以外は毎日同じ流れであることから、記載内容に変化がなかった。また、業務に追われ、記録する時間がなく、時間外で行うこととなった。
- ・写真添付（毎日でなく、行事や変化があった時に記載）・・・日常の様子を写真で記録し添付することで、どの場面でもどのような雰囲気であったのか家族へ伝わりやすくなった。

《考察》

『自分史ノート』を入居者・家族・スタッフで共有することで、短期記憶が低下されている方でも、自分が写って

いる写真には興味を示し、若い時の話しや子どもとの思い出を自発的に話すようになり、会話が弾むようになった。一部の家族からは、「こんな顔をするのは知らなかった」と喜ばれる方もおり、入居者・家族・スタッフを繋ぐツールとなった。

4. 認知症の人によるコーラス

認知症の人（グループホーム利用者・家族・ボランティア・スタッフ）

5. ランチョンセミナー 公益社団法人日本認知症グループホーム協会常務理事 繁澤 正彦 氏

テーマ「平成30年度介護報酬改定」～会員の皆様の質問にお答えして～

<今回の介護報酬改定の構造的ポイント>

○ベースとなる基本報酬は現状維持

○重点的な取り組みを加算等で評価

（重度化や医療ニーズの増加への対応（他職種連携）

- ・医療ニーズへの対応～医療連携体制加算（Ⅱ）（Ⅲ）の区分新設。
- ・入退院支援の取組～入院時費用の新設、初期加算の算定要件の見直し。
- ・健康管理機能の強化～口腔衛生管理体制加算、栄養スクリーニング加算の新設。
- ・自立支援、重度化防止～生活機能向上連携加算の新設。
- ・身体拘束等の適正化の推進～身体拘束廃止未実施減算の新設。

（地域における認知症ケアの拠点としてのグループホーム）

- ・在宅支援機能の強化～短期利用認知症対応型共同生活介護の算定要件の見直し。

共用型認知症対応型通所介護の基本報酬の見直し。

<全国大会に参加して>

（グループホーム楽楽 實藤裕介）

今回、2日間に渡り全国大会に参加させて頂きました。認知症高齢者に起こりうる症状において、様々な症例があり症状に応じた対応が求められる事を再認識致しました。又、宮崎県では2025年には65歳以上の方が5人に1人となる予想がされている中、介護の担い手不足もあり、若年者や地域の方への介護への関心を持っていただけるような取り組みや賃金の底上げ等の対策が必要と感じた。高齢者施設で働いている中、ご家族への報告を口頭でずっと行っていたが他施設の伝達方法が参考となり、現行の方法で、ご家族へ十分に入居者の事が分かりやすく行えているのか考える機会にも繋がった。

<全国大会に参加して>

（グループホーム一喜一喜 今村雅也）

GH全国大会に2日間参加いたしました。今回で2回目になりますが、以前私が参加した時は認知高齢者に対する考え方や対応などを学びましたが、今回は地域包括ケアシステムにおける構築について2日間講義や分科会・ポスターセッション様々な取り組みや、これからますます高齢社会になり高齢者社会について今何が必要で何が求められているのか問われる研修になりました。

以前の介護であれば利用者や家族やスタッフの関わりのみが多く感じていましたがこれからの社会ではいかに地域の方に認知症の方々の生活状況を知って頂き、認知症グループホームケアの素晴らしさや必要性を発信して介護従事者だけではなく地域を含めて一つの家族となり共に支え合う必要があると強く感じ認知症になっても大丈夫な社会構築を作っていく必要があると感じました。それと同時に深刻な介護人材や介護現場の問題・課題など多くあり

今後は本当に働きやすい環境整備を行い従事者の負担軽減や介護業界のイメージ改善の必要性を強く感じました。これからも介護従事者として働く以上は責任を持ち、安心して尊厳ある生活を送れるように日々邁進しなければいけないと参加し改めて考えさせられました。

平成30年9月22日

<報告者>

医療法人 岡田整形外科

グループホーム一喜一喜 今村雅也

グループホーム 楽 楽 實藤裕介